

猛暑の中の葬儀

赤谷慶子

エルニーニョ現象のため日の本は現在猛暑續けり。世界のいづこにても山火事あり、強烈なる颱風および豪雨等、異常気象の報道日々これ見ざるの日あらざるなり。妹夫婦在住の北ドイツは冷夏にて、夜な夜な最低気温は十度なり。

このゆゆしき酷暑のさなか、文月と葉月に身近に葬儀ありき。コロナ感染者増大し、家族葬多しと葬儀屋言へり。文月は文語の苑の發起人にもある、朝日新聞の大記者なりし早房長治氏なり。八十五歳なりき。今年初めに体調を崩し入院繰り返し、やをら體力落ちゆきき。新聞記者の模範たるべき生き方せられ、やむごとなき學問教示せられし大先達なり。残念なれど、日本男子の壽命なれば致し方なし。奥方と四人の子供たち孫たち、加へて新聞社の同僚、後輩に見送られたり。

葉月従姉妹の娘、四十七歳になりしばかりに、癌のため他界せり。三年前にステージ高き癌發見せられ、抗癌剤治療繼續すれど、果ては體中に轉移し天に召されにけり。文月までは仕事こなしたれば、逝去する一週間前に體調著しく崩し緊急入院し瞬く間に逝きにけり。通夜には九十二歳の祖母放心して魂抜けたるが如し。二親はあまりにも俄かなることゆゑ、涙も出でず健氣にふるまひたれど、何とも痛ましきさまなりき。會社の同僚や友どもは棺の前に泣き崩れ、おのれは正視するを得ざりき。四十九日終はらば、菩提寺なる芝の増上寺に納めらると聞きおよぶ。

通夜の終りに僧侶かいつまみて言ふは「人は遅かれ早かれ、何時か去り行くは必定。また會ふべき日あり、いづれの日にか、と言ひて見送りましたまへ。加へ、姿見えずとて消えたるにはあらず。日々かたはらにありとは知るべし、とぞ仰せ給ふ。

(令和五年九月三日受附)